

就学前までに獲得したい力 —小学校1年生担任への調査から—

The ability that school children should get before they go to elementary school
—from a survey of first grade class teachers—

寺井弘実
Hiromi TERAII

〈要旨〉

幼稚園・保育園・学校での養育相談や発達相談の臨床活動での相談件数は増加するばかりであり、小学校では低学年が増加傾向にある。筆者が平成22年度に実施した保育士への意識調査では、3歳児担任の全員が「クラスに情緒的問題が気になる子どもがいる」と回答していた。今回は、小学校の1年生担任に、「学習面」「社会面」におい就学前までに獲得してほしい力の記入と、その力のクラスでの獲得割合と保育現場に望むことをアンケート調査して、担任が就学前までに必要と考えている力の内容を明確化し、今後、筆者が作成した「保育士職能向上プログラム⁽¹⁾」に含めていくことが目的である。

調査結果は、担任は【学習面】:【社会面】ともに、「聞く力」「話す力」を望んでいたが、獲得率は非常に低く、かつ獲得するための保育現場への具体的要望も既に行われている内容であった。養育が家庭から保育現場に益々移行していく現状の中で「聞く力」「話す力」の発達課題を卒園までに保育現場でどの程度まで達成させるかの具体的目標とそのための方法を考察していくことが今後の研究課題であり、幼小連携は子育て支援でもある。

〈キーワード〉

子育て支援, 幼小連携, 発達課題

I はじめに

筆者は、A県内の学校巡回相談員として、保育園・学校内での幼児・児童生徒の問題行動の相談を受けている。相談数は増加する傾向にあり、特に小学校低学年での相談数が増えてきている。筆者が平成22年度に実施した保育士への「クラスの中に気になる子どもはいますか」という調査⁽¹⁾では、3歳児担任の全員が「自分のクラスに情緒面で気になる子どもがいる」と回答しており、就学前の幼児期から「子どものこころの問題は表面化していること」が明らかになった。また、その原因としては、「子ども自身の問題」というよりは、「養育の問題」としてとらえて、保育現場での関わりの重要性は認識している結果となった。しかし、保育現場では、保護者対応を含めて、子どもへの具体的な支援の方向性は不明確で、今後の子育て支援のためには「具体的な保育士の職能向上プログラム」作成が急務であり、乳幼児の育ちを確かなものにしていくためには必要性が高い。筆者は、保育士との事例検討会を重ねて「保育者の職能向上プログラム～子どもの心理的理解を深める～」を作成した。

今回は、ライフサイクルの視点から、保育園卒業後の子どもたちが最初に生活する小学校1年生担任が「就学前までに子どもに対してどのようなことを望んでいるか」の意識調査を行い、学童期を見据えた内容を含んだ「保育者の職能向上プログラム作成」を目的とする。

現在の学校現場では、小学校1年生時点から教室内で「離席する」「担任の指示に従えない」「登校渋り」などの問題行動が生じ、徐々に教室全体への落ち着きになさにもつながり、学習の遅れにつながりやすいという現状に多くの小学校担任は悩んでいる。

このような現状のなかで、小学校1年生の担任は、学校という新しい環境により早く適応して、学校生活を気持ちよく過ごせるためには入学前までに「どの程度までの心の育ち」を望んでいるかを、「学習面」・「社会性」に分けてアンケート調査をして、その結果内容を考察し「乳幼児期の子育て支援」、「幼小連携の在り方」に活用していきたい。また、「保育士職能向上プログラム」の内容にどのように取り入れていくかを検討していく。

II 調査報告

1：調査内容

① 調査対象

A県内の8つの小学校の1年生担任：18名

② 調査手続き

調査期間：平成26年7月～平成26年9月

小学1年生担任に配布後日、郵送・手渡しなどで回収

③ アンケート調査内容

◆ 子どもが小学校という新しい環境により早く適応して、学校生活を気持ちよく過ごせるためには、担任として入学前までに「どの程度までの心の育ち」を望むか？「学習面」と「社会性」について別々に具体的に3つあげて、以下の①・②・③の記入をお願いした。

- ① その力は入学から学校生活では、どのような時に必要としますか？
- ② 担任するクラスの児童の何割ぐらいが、入学時期にその力を「身に付けて」いたか？
[A：0～4割 B：4割～6割 C：6割以上]
- ③ その力を「身に付けておく」ために、入学前の保育現場【幼稚園・保育園】に望むことはあるか？

◆ その他、保育現場に望むことはありますか？

2：結果

【学習面】：12項目に分けられた。

上位の7項目の内容

順位	内容	①	②	③
【1】 13人 (72%)	ひらがなを読む・書く	学習全般 自分の名前が書ける程度	A：0 B：1 C：12	・簡単な練習・指導 ・マークではなく名前の使用 ・本の読み聞かせの時に指導
【2】 10人 (55%)	集団の中で話を聞く力	学校生活全般	A：1 B：7 C：2	・話を聞く時間の確保・習慣 ・個別な声掛け
【3】 7人 (42%)	話す力	学習全般 これからの人生	A：0 B：4 C：3	・大きな声で話す経験・声掛け ・様々な体験活動
【4】 4人	10までの数を数えられる	グループづくり 運動会の玉入れ	A：0 B：0 C：4	・生活の中で使用する習慣 ・順序数だけで十分
【5】 3人	鉛筆を正しく持つ	書く場面	A：2 B：0 C：1	・正しく教えてほしい。小学校での矯正は困難
	座って待てること	聞くととき 学習時間	A：0 B：0 C：3	・椅子の座り方の指導 ・集中する作業を大切に
	正しい姿勢	授業中全般	A：0 B：3 C：0	・身体を動かす遊び

順位	内容	①	②	③
その他 2人	数字への関心		A：0 B：0 C：2	
	手先の器用さ		A：0 B：2 C：0	
	集中力		A：0 B：2 C：0	

【社会面】：10項目に分けられた。

上位7項目の内容

順位	内容	④	⑤	⑥
【1】 12人 (67%)	公共マナーの獲得 ・挨拶 ・お礼 ・謝り ・順番 ・暴力を振るわない 等	・授業中 ・学校生活全般	A：0 B：6 C：6	・謝ることの大切さ ・状況にあった挨拶を生活の中で使用する ・決まりを守る ・決まりを守ることが楽しい活動になることを伝えて
【2】 8人 (44%)	自分の気持ちを伝える力	遊び・トラブルの際の問題解決	A：0 B：6 C：2	・言葉での表現練習を短時間でもしてほしい ・気持ちをじっくり聞く時間を増やしてほしい
【3】 7人 (39%)	基本的な生活習慣の獲得 ・着替え ・歯磨き ・排泄 ・あとかたづけ 等	学校生活全般	A：1 B：1 C：5	正しいトイレの使い方 ・自分のことは自分でする習慣 ・就学が近くなったら自由にトイレにいけない時間を延ばす練習
【4】 6人	仲良く遊ぶこと 親切にすること 食事関連 ・偏食 ・マナー ・時間内 ・箸使用	学校生活全般 給食時間	A：0 B：4 C：2 A：0 B：5 C：1	・関わり方を教えてほしい ・グループ活動 ・小学校との連携必要 ・家庭の問題が大きい ・マナーを教えてほしい
【5】 5人	人の話を聞く力	授業中を含めて朝の活動など	A：0 B：3 C：2	・じっくりと聞く練習 ・聞く姿勢を取ってから話す習慣
【6】 3人	時間・集団に合わせた行動	生活全般	A：0 B：1 C：2	時計を見ながらの行動

順位	内容	④	⑤	⑥
その他 2人	自分のことを 自分でする		A:0 B:0 C:2	
1人	親から離れて 休まず登校		A:0 B:0 C:1	
1人	言葉づかい: 汚い		A:1 B:0 C:0	

【保育現場に求めること】

- 1, 保育現場に多くのことを任せすぎて家庭での教育力が低下しているように思う。社会のニーズもあり難しい問題であるが・・・。
- 2, 保育所や学校と上手に連携していく大切さを保護者に理解してほしい。親育てが今後は大切。
- 3, 保育園では多くの身体遊びを経験させてほしい。
近年、鉄棒でさかさまになれない子・雲梯ができない子鬼ごっこで衝突する子が増えているように思います。
- 4, 行事等で関わる時間を増やして幼小連携強化

Ⅲ まとめ

1, 結果・考察

【学習面】

就学前までに「ひらがなを読んだり、書けたりできてほしい」との回答が7割と1位である。この力は学校生活全般に必要と考えているが、クラスの6割以上が獲得していると9割の担任が回答したおり、子どもの獲得率が高い。保育現場への要望は、「簡単な指導」「自分の名前を書く」等の内容である。

2位・3位は「集団のなかで聞く力」「話す力」である。合計すると9割以上の担任がこの力の獲得を望んでいる。しかし、2位「聞く力」の獲得率は、《クラスの6割以上》との回答が2割と非常に低く、《4割以下》との回答も1名いる。学校生活全般に必要と考えている「集団の中で聞く力」の弱さが明らかである。3位の「話す力」の獲得率は、《クラスの6割以上》との回答は4割であり「聞く力」の獲得率より高いが、やはり低い値である。クラスの半数以上の子どもが獲得しないで就学していると回答した担任が6割いる。「学習全般・これからの人生に必要」と考えている「話す力」の弱さも明らかである。保育現場への要望には、「聞く・話す時間の確保・習慣」「個別の声掛け」「様々な体験活動」等多くの内容である。保育現場では、既に日常的に取り入れている内容であり、今後の取り組みの在り方や内容に新たな改善が必要とされる。

4位の「10までの数を数える」の獲得率が高い。

5位の「鉛筆の正しい持ち方」「正しい姿勢で座る」の

獲得率は半数程度と低く、保育現場への要望には、「正しい持ち方を教えてほしい、入学後の修正は困難」「身体遊びをより多く」という内容である。保育士の配慮で容易に修正可能な内容である。

【社会面】

「基本的な規範意識：挨拶・お礼・謝る・順番を守る・叩かない 等」を望む担任が約7割と1位である。この力は、コミュニケーション・授業中・学校生活の際に必要と考えているが、クラスの6割以上が獲得しているとの回答と半数程度に留まるとの回答は同じ割合であり、個人差はあるが、就学時の子どもの規範意識の獲得率の低さが明らかである。規範意識獲得の低さは、学級内の学習環境におおきな影響を与えることは自明なことであり、就学までにどのように獲得させていくかは保育現場での大きな課題になる。保育現場への要望は、「決まりを守る経験を多く経験させて、そのことが楽しく活動できる基盤であることを伝えてほしい」「状況のあった挨拶の言葉を生活のなかで多く使用してほしい」が計8人と多い。基本的な規範意識は、エリクソンの発達段階⁽²⁾では、3歳から関わる大人が育てていくと考えており、未満児保育の割合も年々増加している日本社会の現状からみると、乳幼児期に集団で多くの時間を過ごす保育園・幼稚園では、この課題獲得のための役割が今後益々大きくなると考える。金沢市が公表している平成25年度3歳以下の子どもの保育所入所率は38%であり、3歳児以上では56%が保育所、残りが幼稚園に在籍である。乳児時期から家庭のなかで過ごす時間が少ない子どもが増えてきていることを示している。今後、保育所入所数を増やす動きの日本社会は、子どもは早期から保育所での集団生活を体験して育ってくることを前提に「育ちの問題」考えなくてはいけない時代になる。保育所・幼稚園の役割の重要性は増すばかりである。

2位には、【学習面】でも3位にある「話す力：自分の気持ちを伝える力」を4割強の担任が挙げている。クラスの半数程度しか獲得していないとの回答が7割である。5位「聞く力」と合計すると7割強の担任が、【社会性】においても獲得してほしい力として「話す力」「聞く力」を挙げており、この割合は【社会性】の第1位となる。保育現場への要望として、「子どもの話をじっくりと聞いてほしい」3名「短時間でもよいから表現練習をしてほしい」5名など要望が多い。すでに、実行されている内容であり新たな内容の取り組みが考案されるべきである。

3位には4割の担任が「基本的な生活習慣の確立」を挙げているが、6割以上の獲得率は高く問題性は低い。基本的な生活習慣の確立は1歳児から養育者を通して始まると考えており⁽³⁾、保育現場・家庭での取り組みの成果であると考えられる。「基本的な生活習慣」のように、成果が具体的で明確

な内容に関しては取り組みやすいが、「聞く力」「話す力」のような成果基準が不明確である内容に関しては、就学前までの力と重要と担任が考えているが、保育現場での取り組みが不十分である、この「達成基準作り」が今後必要になる。

4位は「仲良く遊べる力」「食事」に関する内容である。3割の担任が挙げているが、クラスの6割以上獲得しているとの回答はそれぞれ3割と2割と非常に低い。保育現場への要請は、「グループ活動を多く」「食事：偏食・マナーを教えてほしい。家庭の問題も大きい」などである。食事のマナーを教えるという事は、保育現場の保育士自身がこの力を獲得していなければならない。保育現場にはマナー獲得できていない若い保育士も多く、この獲得のためには保育士の教育内容に組み入れる必要がある。また、偏食に関しては子ども自身の個人的な味覚の過敏さとも関係しており、難しい問題である。筆者が受ける保育相談内容の中にも、就学を控えて偏食のわが子が給食に苦労するのではないかと不安の主訴が少なくない。保育現場へ要請に「なるべく好き嫌いをなく食べるような指導」「苦手なものも一口食べてみる」などがあり、教員も個人的な特徴で偏食に苦しむ子ども理解の必要性があると考え。食べるものが豊富にある現代社会における、〈嫌いなものを苦し

みながら食べる意味とは何か?〉を考える時代に来ているのではないか。

【保育現場に望むこと】

◆家庭での教育力低下の問題～保育現場に任せている～

◆幼小の連携の強化と、家庭との連携強化

◆身体遊びを多く取り入れる保育内容を期待

内容は納得できるが、今後、益々子どもは保育園・幼稚園を利用しながら育つ流れのなかで、保育園が負っていく内容は現実的に増えていき、保育園は、養護施設のような要素をも含んでいくのではないかと筆者は考えている。

IV 今後の課題

「乳幼児期は小学校の予備校ではない」という意見もあるが、育ちは連続性であり、全ての子どもは保育所・幼稚園卒業時に獲得した力で小学校に入学してくる。何を獲得してくるかは重要である。現在の小中連携の強い流れのなかで、幼小の連携は遅れている。今回の調査結果から見えてきた、就学前までの【学習面】【社会面】の両面において獲得の必要性が高いが、獲得率が低い「聞く力」「話す力」の明確な達成目標と達成のための方法を考察することが今後の研究課題である。

参考文献

- (1) 金沢星稜大学総合研究所年報NO33 p37～42
- (2) Erikson, E, H (仁科弥生訳)：幼児期と社会1・2 みすず書房 1977
- (3) 金沢星稜大学総合研究所年報NO31 p57～62